

1	脂質は 3 大栄養素の中で一番単位重量あたりの熱量が大きく、その比重も、水分を中心とするほかの身体組織よりは大きい(重い)。	×	脂質は 3 大栄養素の中で 1 単位重量あたりの熱量が大きい、一方水よりも軽く、水に浮く。つまり軽量で効率よくエネルギーを保管できるので、水陸を問わず、動物では最大の貯蔵エネルギーである。
2	健常状態では、血糖が上昇してくると膵β細胞の糖取り込みが増加し、いくつかの段階を経てインスリン分泌が上昇する。	○	問題文の通り P9 左上段 B 参照。
3	生体内で、血糖を降下させる作用のあるホルモンは、インスリンのみである。	○	P7 参照。問題文のとおり。その他血糖調整に関わるホルモン、グルカゴン、カテコールアミン、成長ホルモン、副腎皮質ホルモンは、すべて血糖を上昇させる。
4	2 型糖尿病の自然史において、その発症前から発症期、血中インスリンは低値を示す。	×	p13 および p15 右上 D。2 型糖尿病発症前からインスリン抵抗性が存在し、代償的にインスリン分泌はいったん上昇する。一部の人では、やがて代償不全となって必要な分泌が維持できずに血糖が上昇し、糖尿病とな
6	低出生体重児で肥満や糖尿病発症頻度が高くなるのは、彼らのもつ遺伝子そのものの変化ではなく、エピゲノム制御が関連しているとされる。	○	すでに受精のときからその個体の遺伝子配列は決まっている(父母から 1/2 ずつもらう)ので、たとえ結果低出生体重児であっても根本の遺伝子配列は変化しない。染色体の三次元的な巻き取られ構造やその緩みなどに関連するエピゲノム就職が関連するとされる。P18 左下 e 参照。
7	2 型糖尿病患者の典型的な脂質プロフィールにおいては、糖の利用障害から脂肪の分解と消費が高まって中世脂肪が低値となる。	×	p22 右 C 参照。糖尿病においては、インスリン抵抗性→脂肪分解→血中 FFA 増加→LPL 活性低下と VLDL 合成増加、となり、中性脂肪は上昇する(高 TG)。
8	MODY とは、常染色体優性遺伝糖尿病であるが、比較的発症年齢が高く、病像は 2 型に類似し、インスリン抵抗性が高く肥満型が多い。	×	p39 右産段落め。インスリン分泌不全を主体とし、痩せ型が多い。その他の点では 2 型に類似する。
8	ステロイド糖尿病、特にプレドニゾロンを経口的に朝一回投与したときの糖尿病患者における血糖は、翌朝にはむしろ低めになる。	○	p43、右中段 d。参照。問題文の通り。したがって、ステロイド使用中の患者において、朝の空腹時血糖だけをコントロール指標としていると、高血糖を見逃すことがある。
9	1 型糖尿病のうち、劇症と診断されるものでは、急速な著明高血糖がくるので、HbA1c は 10%以上になることが多い。	×	前者の状況は、グルカゴン分泌もインスリン同様に低下しているから、後者の状況は脂肪動員が低下し、ケトン体産生が少ないため、とされる。P41 左① 参照。